

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1 / 1)

研究題目	サルヴァトーレ・チャリーノのフルート独奏作品集の CD 制作によるフルートの特殊奏法および特殊音響についての研究「中間報告」	報告書作成者	若林 かをり
研究従事者	若林かをり 協力:有限会社コジマ録音		
研究目的	<p>本研究は、現代イタリアを代表する世界的な作曲家サルヴァトーレ・チャリーノの「フルート独奏のための作品集 第一集・第二集」(全 12 曲)を、日本人初の録音として収録し CD リリースすることを目指します。</p> <p>作曲家サルヴァトーレ・チャリーノによる「フルート独奏のための作品集 第一集・第二集」(全 12 曲)は、多様な現代奏法とその独自の記譜法によって、ほぼ全ての音が通常のフルート奏法とは極端に異なる特殊な奏法で創作されています。</p> <p>2015 年には、世界3大フルート コンクールの一つである、ミュンヘン国際音楽コンクール(Internationaler Musikwettbewerb der ARD)フルート部門での課題曲に取り上げられたチャリーノ作品は、作曲者が提唱した多彩な現代奏法を含んでおり、実際の演奏において、フルーティストに高度な演奏技術が要求されます。しかしながら、記譜法においても独自性と独創性に富んだチャリーノ作品は、その記譜法と具体的な奏法がまだ十分に認知されているとは言い難く、奏者は楽譜を前にしても、作曲者の望んだ演奏方法が分からず、その作品に取り組むこと自体が一つの高いハードルになっている現状があります。</p> <p>本研究では、現代奏法による特殊な音響効果によって創られた、非常に個性的で、演奏難易度の高いこの作品集を、高度な録音技術を持ったレコーディング会社と連携し、楽譜に忠実に、かつ、作曲者の意図を反映した形で録音しリリースすること、そして、このリリースが、現代における最先端のフルートの可能性を、多くの方に広く知っていただく機会につながり、今後、現代作品に取り組む奏者や、作曲家への刺激となり、今後の文化発展の一助となることを目的としています。</p>		

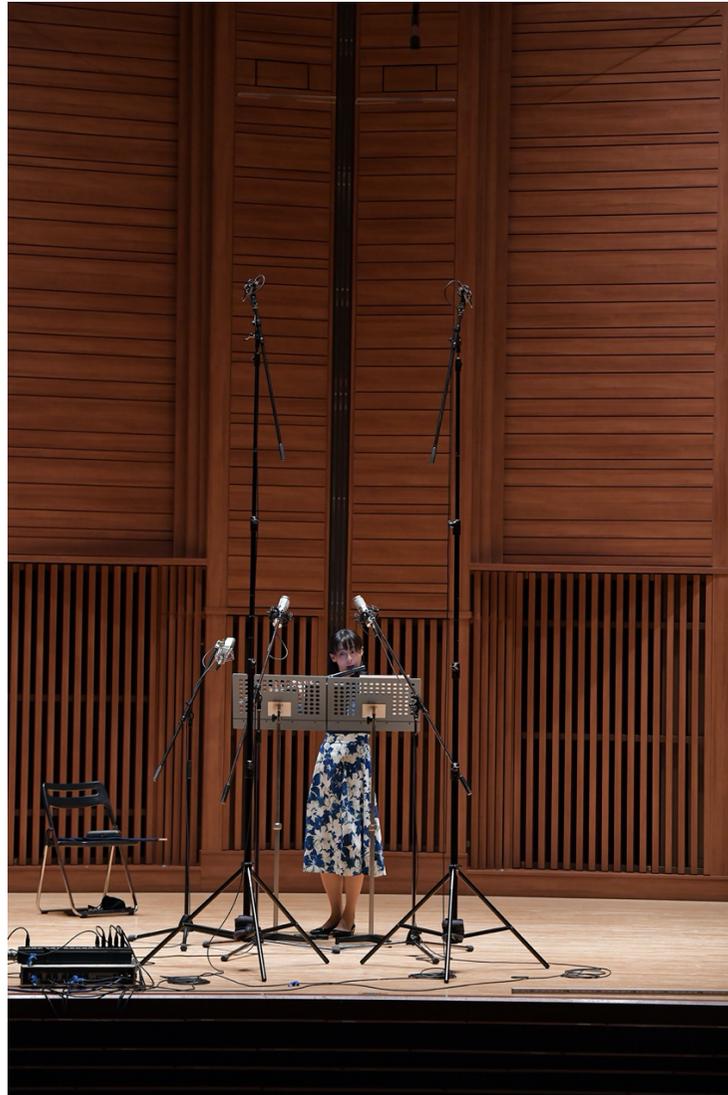
<p>研究内容</p>	<p>いわゆる「フルートの音」という概念を根底から覆し、新しい奏法によって新たな楽器の可能性を導き出したフルートの作品たちを、どのようなアプローチで、どのようなマイクで録音すれば、作曲家が描いた楽譜に忠実な音響が再現できるのかを研究します。</p> <p>生演奏を聴くとき、わたしたち人間の耳は、聴きたい音を意図的にフォーカスして頭の中で全体像をイメージして(感じて)聴くことができます。息を吸う/吐く音やキーを押す/外すというような非常に小さな音から、大音量によるクラスター音までを要するシャリーノ作品の録音のためには、普通のクラシック音楽の録音とは異なるアプローチが必要になることでしょう。</p> <p>CDという媒体(=聴衆は録音された音を聴くこと)を想定し、どのようなマイクをどのような距離で、またどのような配置で録音し、作曲家の意図する音響効果をどのようなアプローチで立体的に再現するのかを、録音技術に定評のある有限会社コジマ録音の協力を得て実施します。</p> <p>〈現在までの研究活動実施状況〉</p> <p>2019年06月 - 07月 コジマ録音での打ち合わせ(主に、マイクの選定・セッティング方法や特殊な奏法の收音について)</p> <p>2019年07月 (一社)日本フルート協会会報(No.274)に論文「シャリーノ作品におけるフルートの特殊奏法とその記譜法について」の加筆・修正版を掲載</p> <p>2019年08月 第19回日本フルートコンベンション 2019 in 福岡での公演にて、シャリーノ作品の演奏</p> <p>2019年08月-2020年03月 収録 および 一部の収録作品の編集作業 (その後、2020年4月よりコロナウィルスの影響により作業中断)</p> <p>2020年09月末~12月上旬 音源編集作業再開</p> <p>2020年11月 NHK-FM「現代の音楽」に出演。シャリーノのフルート作品について解説・実演・録音作品の放送</p> <p>2020年12月中旬 コロナウィルス再拡大の影響により再度、作業中断。(メールなどでやりとり可能な出版に向けての事務連絡は継続)</p> <p>〈今後の予定〉</p> <p>2021年03月-2021年08月 編集作業再開(見込み)、ブックレットなどの制作、出版・リリース準備</p> <p>2021年09月 CD リリース</p>
-------------	---

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1 / 1)

<p>研究のポイント</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 微弱音から大音量によるハーモニッククラスター音まで、ダイナミックレンジが極端に幅広い特殊な音を、どのようなマイクとセッティングによって、収録するか。 2. 収録音のマイクバランスや音響バランスを、どのように施して、作品の立体性に反映させ表現するか。(作品によって、使われている現代奏法の種類が違い、表現される作品の”狙い”も異なるため、どのように、CD・作品集全体としての統一性や一貫性をとりながら、作品毎の特徴を生かせるような効果をつけるか。)
<p>研究結果</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 通常のクラシック作品の収録セッティング(フルートの比較的側に2本、ステージ上の少し高い位置に2本:アンビエント)に加え、キーを叩く・外す指示の微弱音(キーノイズ)を拾うために、フルートの足部管に1本のマイクをセッティングすることとなった。(足部管近くにマイクをセッティングしなければ、キーノイズの収録ができなかったため) 2. まず、作品毎に、収録した音のバランス調整とミキシングを行い、その後、全体の統一性を考えて、最終的なバランスを調整した。足部管近くに配置したマイクは、作品の再現に必要な微弱なキーノイズの音を確実に拾うが、逆に、指示のない部分で、演奏の都合上(意図的ではなく)鳴ってしまう音も収録されてしまう。また、キーノイズの必要のない作品においては、至近距離にマイクがあることで、空間の広がりイメージにも作曲意図との異なりが生じるように感じた。そのため、必要のない作品についてこのマイクの扱いをどのようにするか:キーノイズの必要のない作品でこのマイクの音を切ってしまうても良いか:作品集全体としての音像の統一性・一貫性という意味において、非常に難しい選択となった。 <p>・2019年度に行ったレコーディングによって、「作品集 第1集、第2集」に納められている全12作品の音素材の収録は一通り終了しました。その後、コロナウイルス感染症の蔓延による作業中断を経て、現在10作品の編集がほぼ終わり、そのうちの7作品の音響バランス設定の方向性が決定している状況です。</p>
<p>今後の課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・まだ手がつけられていない作品の編集作業と、音響バランス設定の作業の継続 ・CD全体としての音響バランスの統一性の決定 (場合によっては、音素材の部分的な録り直しも検討中)

【撮影風景・マイクセッティング】



(注:写真, データ, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)